

橋口倫介著

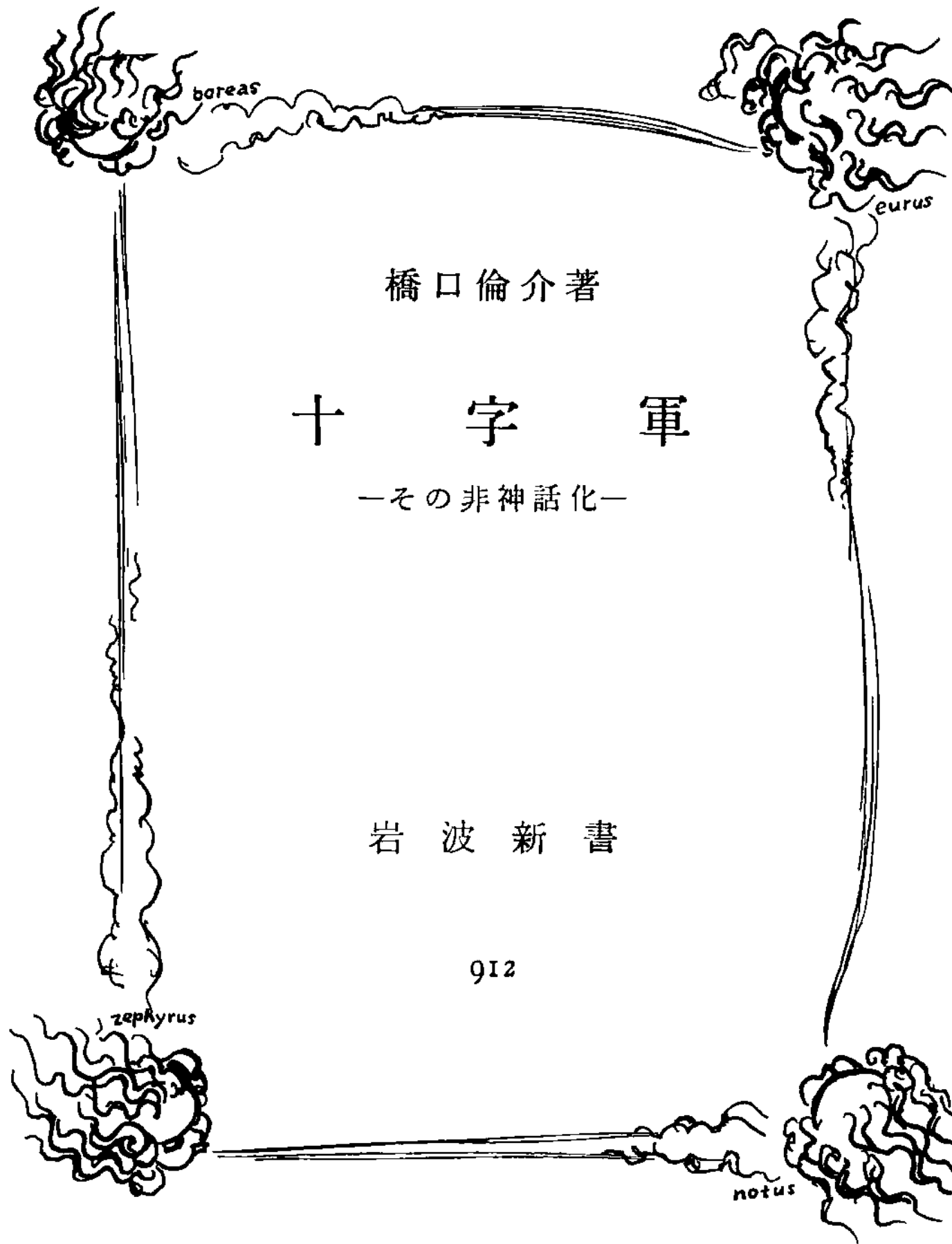
十字軍

—その非神話化—



岩波新書

D 18



橋口倫介著

十字軍

—その非神話化—

岩波新書

912

橋口倫介

1921年東京に生まれる

1944年東京大学文学部西洋史学科卒業

専攻—ヨーロッパ中世史・教会史

現在—上智大学学長・文学部教授

著書—「騎士団」「中世のコンスタンティノープル」

訳書—R. グルッセ「十字軍」

C. モリソン「十字軍の研究」

B. ギュマン「中世教会史」

R. ベルヌー「テンプル騎士団」

十 字 軍

岩波新書(青版) 912

1974年11月20日 第1刷発行 ©

1986年4月20日 第14刷発行

定価 480 円

著 者 はし ぐち と も すけ
橋 口 倫 介

発 行 者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
発 行 所 株式会社 岩 波 書 店

電話 03-265-4111

振替 東京 6-26240

印刷・三陽社 製本・田中製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan

目次

はじめに……………一

騎士のロマンか？ 神のみ業か？ 旧約の世界 十字架の道行き
贖罪か、精神的アリバイか？ 出稼ぎと出世主義 運動の全体像を

I 前兆と胎動……………一五

——九〇〇年前に何が起りつつあったか——

1 大変動の世紀……………一五

気候の変化 過疎からの脱出 社会身分の流動

2 十字軍運動の精神的風土……………二四

経済現象と精神状況の総合 聖俗ともに建設ブーム 築城ラッシュ
巡礼熱 前兆の数々 十字軍は自然発生か、作為か？

Ⅱ 勸説とその反響 四三

——直接人々を動かしたもの——

1 まぼろしの十字軍宣言 四三

クレルモン公会議 熱狂的な反響 まぼろしの原典
のフランス行脚 望外な反響 ウルバヌス

2 民衆十字軍 五七

隠者ピエール 農民十字軍 民衆史観

Ⅲ 東方遠征 六九

——エルサレムへの道——

1 踏みかためられた巡礼路 六九

大軍の勢ぞろい ビザンツ帝国首都への二つのルート 皇女アンナ
の証言 西側のビザンツ観

2 敵地へ 八四

鬼哭啾々の道 セルジューク・トルコ族との戦い 総司令官の戦病
死 ようやくエルサレムへ

Ⅳ 聖地の解放……………九

——パレスチナをめぐる諸民族——

1 各宗派共通の聖地……………九

エルサレム陥落 東方の大聖域 大虐殺 イスラム世界の反応

ローマ教会の政策

2 解放がもたらしたもの……………一五

世俗封建国家の誕生 植民すすまず イスラム大統一の兆

Ⅴ 十字軍の理想と現実……………二七

——占領地維持の空しい努力——

1 十二世紀ルネサンスと十字軍……………二七

新しい人間観 シトー修道会とテンプル騎士団 イスラム聖戦の上

げ潮 一一四七年の十字軍 聖ベルナルルの功罪

2 聖地のレアリズム……………一四四

ダマスクス争奪の意味 シリアの関カ原ハッティンの戦い エルサ

レム再陥落 リチャードⅡサラディン協定・一一八七年の十字軍

Ⅵ 凋落と破局……………一六三

——海に掃き落とされるまで——

1 色あせた錦の旗……………一六三

反ヘレニズム コンスタンチノール征服 フランス人のアテネ占領
大人もいた少年十字軍 隴を得て蜀を望む枢機卿

2 破門皇帝の寛容と聖王の不寛容……………一八二

国際人フリードリヒ二世 法王十字軍の逆説 聖王の唯一の過ち
キプロス島への総退却

むすび……………二〇五

——十字軍の非神話化——

一二九一年以後 十字軍の自己分裂 裁かれた戦争

参考文献……………二二七

あとがき……………二二三

十字軍史略年表

はじめに

十字軍は中世騎士の華麗なロマンであつたといわれる。

騎士のロ
マンか？

なるほど、中世の年代記作者（歴史家）たちは、美々しい鎧兜に身をかため、色とりどりの旗指物をひるがえして駿馬にうちまたがり、槍ぶすまをかまえて戦場を疾駆する騎士どもが、群がる異教徒の大軍をむこうにまわして、小アジアの山中に、北シリアの平原に、あるいは聖地パレスチナの大都城に、息つくひまもなく勇戦奮闘しつつ、あまたの武功をかちとる壯觀を、絢爛たる戦争絵巻物に語りつたえている。

ロマンの主人公には名だたる王公の戦士あり、無名の遍歴騎士あり、聖遺物を捧持して督戦する僧正（司教）あり、法衣に胸甲をつけた僧兵（修道騎士）あり、身分も郷国もさまざまに、にぎやかな顔ぶれである。そのうえ、英雄豪傑のひきたて役として、楯持ち、小姓、歩卒はもとより、種々雑多な非戦闘員の群があり、婦人、子どもまで登場する。進軍の途次、味方の軍勢の大義名分を説き、合戦にのぞんで神の加護を祈る従軍司祭が軍団ごとに配属され、遠征日誌や戦闘詳報を記録する学僧（修道士）も随行している。まさに、十字軍は一時代の世をあげて催された祭典のロマンとよばれるにふさわしい。

しかし、ただそれだけのことであるなら、十字軍は西洋講談かせいぜい軍記ものの種にされ

る以上には価値のない歴史事象になりさがってしまふだろう。十字軍の歴史はけっしてそのような皮相的な観察だけではとらえつくせない深さとひろがりを持っているはずである。

みずから遠征に従軍こそしなかったが、最初の十字軍の歴史を書きのこした数人の神のみ業年代記作者のうちにかぞえられているノジャン「フランス中部、クレルモン近くの村」のか？

修道士ギベールは、戦場往来のつわものたちのいさおしや、名もない巡礼たちのけなげなふるまいを、永く後世につたえたいと願って、心をつくし麗筆をふるって数巻の著作をものし、その標題に同時代のもろもろの人々の想いをこめるかのように、

「ジェスタ・ディ・ペル・フランコス」

というラテン語の四文字をえらんだ。その意味は「フランク人による神のみ業」であつて、十字軍というこの世紀の大壮舉を、その深い内的な性格においてとらえようと試みた著者の心境を髣髴とさせてあまりある表現である。「ジェスタ」〔中性名詞・複数形〕とは元来、行動する、行為するといふ動詞の過去分詞からできた名詞で、行為の結果生じた事実、それも人間として称賛に値する行為が生んだ記憶さるべき事蹟という意味をもち、十一世紀の中世フランス語にとりいれられて「ジェスト」となり、一民族全体の誇り高い歴史的業績を表現することばとなつたものである。したがつて、「ジェスタ・ペル・フランコス」はフランク人の民族的な鴻業を謳つた叙事詩と受けとることができる。

このかぎりでは、修道士ギベールの著作も、十字軍をその参加者たちの数々のいさおしによつて綴つたロマンと変りはないのであるが、「ジェスタ・ディ」、神のみ業という観点がこれに

加えられることによって、大いに趣が変わってくる。十字軍の事蹟は、その初期の報告者によれば、けっして人間だけの業ではなかったのである。神がそれを命じ、人がこれに従って、神と人との協同作業がおこなわれた、というわけである。

最初の十字軍遠征の発動を勧説したローマ法王ウルバヌス二世が、この神の命令をフランク人たちに伝達したとき、同時代の別の年代記作者であるシャルトルの修道士フーシェは、期せずして聴衆の間から、

「神のみ旨だ(神、それを欲す)！」

というどよめきがあがったことを伝えている。つまり、一〇九五年の十字軍宣言いらい、西ヨーロッパのキリスト教徒は、この運動の指導者も追従者も、遠征の参加者も報告者も、すべての人々が十字軍は神の命ずるところに従って人間がその意を体して行動する舞台であると信じていたことを物語っているのである。十字軍が「聖戦」であるといわれるのは、まさにこの意味においてであって、現実の十字軍の歴史が「聖」なのではない。ましてや、後世の回想者であるわれわれが十字軍を同時代人とまったく同じ心境で「聖戦」とみなさなければならぬといわれは少しもないであろう。

旧約の世界

十一、十二世紀の人々の意識の中で、十字軍が神と人との渾然一体となった一大ドラマとして展開されるためには、神意と人間の行為を結びつけるもう一つの媒介項が必要であつたと思われる。

古代ギリシア人はかれらの民族神話を媒介として、オリュンポスの神々の意志と干渉のもと

に英雄たちが織りなした人間の業を、多彩雄渾な叙事詩に謳いあげた。十字軍時代の人々も古代人の伝承から断絶していたわけではない。一〇九六年に出発した最初の遠征に登場する敬虔で勇猛な司令官ゴドフロワやボードワン一世を、トロイ戦争のギリシア方の総大将アガメムノンになぞらえ、ノルマン人の梟雄ロベルト・ギスカルドをオデュッセウスに見たて、シリア、パレスチナ一帯の戦場を「中世のイリアッド」の舞台と想像しても、いっそう不自然ではない。事実、修道士ギベールの叙述には随所に、アキレスをはじめユリッセス（オデュッセウス）、アジャックス（アイアス）などの名と、かれらの勇ましい行動がひきあいに出され、十字軍士の活躍の描写に精氣を与えている。

しかし、十字軍時代の人々にとって、このような異教の物語よりもっと深い感銘があり、さらに強い共鳴をおこさせる伝承は、かれら自身の宗教であるキリスト教の、そしてその源流であるユダヤ教の聖典の世界にあった。年代記作者たちは十字軍遠征記のいたるところに、ギリシア神話の引用にくらべてはるかに高い頻度で、『旧約聖書』の叙述を援用し、とくにシリアに渡ってから後の記録では必ずかれらが到達した土地にまつわる旧約時代の歴史をひとくさり述べずには、報告の筆を進めることができなかったと思われるほど、かれらの意識は深く旧約の世界と交流していた。

中世キリスト教の知識人である学僧の教養は豊かな旧約聖書の知識とその情緒的なイメージによって構成されていた。かれらはほとんど労せずしてその知識を著作や説教に活用することができ、不便な軍陣のテントにあっても原典なしにその章節を自由に引用することができた。

かれらが旧約の世界に遊ぶ人々であるなら、日常その教えをうけ、その口を通じてしか感化をうけることのなかった当時の庶民たちもまた旧約の世界の住民であった。十字軍はこの意味で、中世と古代の奇妙なアナクロニズムの露呈であるかもしれない。

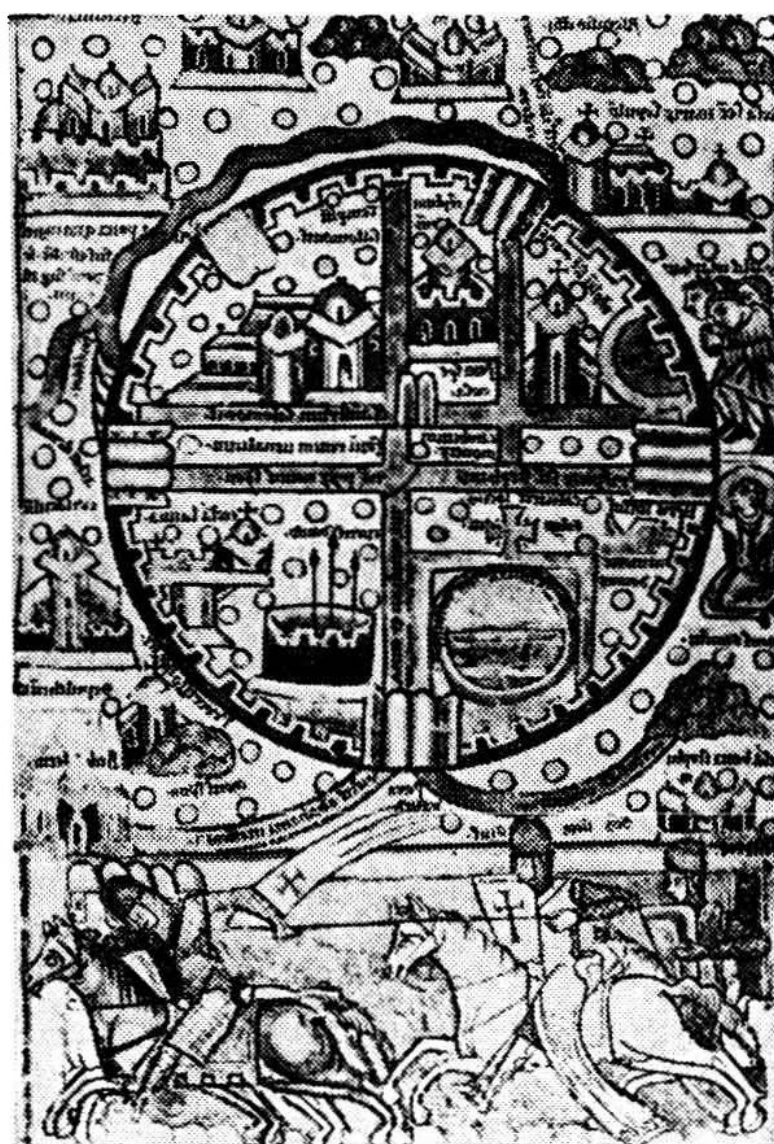
十字架の 道行き

旧約の世界を涉猟しつくした後、聖書の読者が次に導かれるのが新約の叙述、『福音書』の世界であるのは当然のことである。まして、十字軍の目ざす最終目的地が「主の聖なる墳墓」であるからには、参加者の意識がイエズス・キリストの「受難」

と「復活」に集中されるのも容易に納得できる。

人々は指導者から、聖墓の解放におもむくべきことをすすめられたが、その長途の旅路そのものがかれらにとっては苦難に満ちた試煉の連続であり、みずからの十字架を背負ってキリストの受難の苦悩を追体験する道行きとなった。

すべての十字軍士はその通路の苦しみや戦闘の苛烈さを通じて、遠征の道程がキリストの「カルワ



十字軍の目的地エルサレム、12世紀の古地図

リオへの道」に比すべきものであることを知り、キリストの苦しみを自分の苦しみとして噛みしめるところに深い喜びを感じたのであろう。

パレスチナに一步踏みこめば、そこにはいたるところに新約の舞台がくりひろげられている。巡礼者である十字軍参加者は好むにまかせて、そこここにキリストの足跡をたどり、その生涯に思いをさせ、最後にはようやくそこにたどりついた安堵と、念願の成就した満足感をもって、聖墓の前にぬかずき、法悦の境地で主の受難の意味をあらためて考えることになる。こうして、旧約の世界に住む人々は同時に新約の土地を自分の足で踏みしめ、「十字架の道行き」を実践する人々となる。およそ罪を一つも犯さない人はいないし、罪の意識をまったくいだかない人はいない、という認識から人々は争って十字架を負い、キリストのあとに従ってみずからの「カルワリオ」を歩もうとする。これも十字軍の歴史の一側面である。

贖罪か、精神的
アリバイか？

おのれの十字架をとって、キリストの受難に想いを凝らしつつ、歩一步と聖墓への旅程をたどる人々の群は、たとえその中に王公騎士身分の者がいようと、その身に武器をおびていようと、それが敬虔な巡礼者の集団であることに変わりはない。このため、十字軍を「エルサレム旅行」とよんだ年代記作者たちは、その参加者を総称して「巡礼」(ペレグリヌス *peregrinus*)ということばで表現している。史料の記述が「巡礼たち」(ペレグリン *peregrini*)というとき、それは貴賤、貧富、老若男女の別なく、また十字軍参加の直接動機の如何を問わず、すべての同行者をおしなべて包含している。

キリスト教徒巡礼の起源は古く、その伝統は断絶なく継承されてきた。四世紀初めに、ロー

マ帝国がキリスト教を公認すると、それまで抑圧されていた宗教感情がにわかにそのはけ口をもとめてほとばしり出たように、聖地への巡礼行が開始され、五世紀には最初のブームがおとずれる。この流行をまねいた原因の一つとして、コンスタンティヌス大帝の母后ヘレナが熱烈な信心のあまり、聖地一帯の土地で数多くの聖跡の発掘を奨励し、おびただしい聖遺物の発見があつたことを、「教会史の父」カイザレアのエウセビオスが伝えている。この著者については、あまりに護教的であるとの理由で、多少その信憑性に留保がつけられてはいるが、ヘレナ皇太后の信心業によって、最初の荘麗な「聖墳墓」教会が建堂された〔三三五年〕ことは確実な史実である。

その後、聖所と巡礼は有為転変の歴史をたどるが、十世紀以降の「巡礼の大世紀」とよばれる大流行をみるまでに、聖地巡礼という行為がキリスト教徒の信仰の証しとなったことは疑いない。信徒は魂の救済を熱望し、犯した罪のつぐないを果たそうと願って、わざわざ生命、財産の危険をおかしてまでも苦しい巡礼の旅にのぼる。苦行による贖罪という思想と情念がそこにある。

しかし、現代の歴史家や社会学者の巡礼評価はもっと冷く厳しい。十字軍を中世の一種の民衆蜂起と見るある学者は、その大衆行動の扇動者としての予言者たちに注目し、

「予言者は集団的救済のために苦行者の群を生みだす。……その群衆は聖墓解放の情熱をもやし、異教徒の虐殺を使命と思ひこみ……暴力的メシアニズムを表明する」〔G・フルカン〕

とのべて、贖罪の敬虔な願望をいだいた人々が、巡礼行の過程で狂信的な暴徒と化した光景を

描写している。

また別の一社会学者は、当時の西ヨーロッパの支配者、権力者たちが、十字軍遠征隊の送り出しにあたって、これを

「一時的に社会秩序を安泰にするための瀉血、または集団的追放の機会としか考えなかった」(A・ドクーフレ)

と見ている。西ヨーロッパの諸侯・騎士はキリスト教徒どうしの私闘をやめた代りに、中近東に渡って「盗賊領主」になった。もともと盗賊であった者は法王の保証つきで「キリストの兵士」に変身した。その他、無数のいかがわしい人間が誰も彼も、贖罪の美名にかくれて司直の追及を逃れ、海外で大なり小なり戦利品の獲得に狂奔した。「自分の分け前をふやすためには、暴行、偽証、殺人すらも、ありとあらゆる手段が正当化され」、十字軍は「良心の苛責に悩む多くの魂に精神的アリバイを与えた」(R・グルッセ)のである。

出稼ぎと 出世主義

巡礼たちを東方への旅に誘い、信心業というアリバイを与えて掠奪行為を正当化したものに、聖遺物蒐集という風習がある。その起源は、あらゆる宗教に共通した聖者遺骨に対する崇敬に発するといわれるが、キリスト教では前述のコンスタンティヌス時代いらい流行しはじめ、キリストにゆかりの遺品や「受難」にまつわる道具類(キリストの顔を拭った布、磔刑につかった十字架の木片、十字架上のキリストの脇腹をついたローマ兵士の槍など)をはじめとし、聖母マリア、使徒や諸聖人を記念する無数の聖遺物に対する熱烈な愛好の風がひろまった。

古くから伝わるもの、新たに発見されたもの、由緒来歴のはっきりしたものや相当いかがわしいものなど、聖遺物は上は王公、高位聖職者から下は一介の巡礼にいたるまで、西ヨーロッパの人々の異常な蒐集熱をあおりたてるようになり、十字軍時代以降その最高潮期に達する。これにともなうて、地方的な無名の聖人や土俗的伝説上の聖者にゆかりの聖遺物が洪水のようにあふれだし、果ては現存の有徳の士や民衆に親しまれている辻説法師のような人物の着衣や所持品までが聖遺物あつかいされるありさまとなった。人々はまず、近隣の聖遺物を拝観し、その一小部分を分け与えてもらうことから病みつきとなり、蒐集の目的で遠く旅をするようになり、ついには聖遺物の源泉であり宝庫である東方への巡礼を志すことになる。

コンスタンチノープルで、アンチオキアで、そしてエルサレムで手に入れた品々は、たとえばそれがおのぼりさん相手のつまらない土産品であつても、当人にとっては血と汗の賜物であり、遍路の誓いを果たした証しの記念品である。ましてそれがめつたに得難い真物の聖遺物やそれに類する貴重品である場合は、獲得者の名誉となり財産となる。このたのしみを予測に入れることなく十字軍に参加した巡礼者は、おそらく一人もいなかったであらう。これは一種の出稼ぎである。

聖遺物が巡礼のスーヴニール以上の財産になることは稀であつたとしても、聖地巡礼の目的には常に精神的な報いのかたわらに物質的な報酬がつけ加えられていて、故国にあつてはうだつのあがらない人々を好餌で呼び集めていた。法王ウルバヌス二世は、かなり露骨に西ヨーロッパ社会の貧しさと東方の豊かさを対比させつつ、聴衆の物欲と出世欲とをあおりたてるよう

な演説をおこなったらしい。

「あなた方の住むこの土地は四方を、海にとざされ山並にかこまれ、多大の人口に比して、あまりに狭く、資源にも恵まれていない。またこの土地はその耕作者にしろうじて足る食糧しか供給しない……」〔修道士ロベール〕

というような不景気な話を聞かされれば、誰でも他郷に出稼ぎに行きたくなるであろう。

十字軍遠征の財政は法王庁が財源「十分の一税」をつのり、その管理にあたったが、主な経費の負担者は参加を希望した領主・騎士で、行軍中の出費はすべて遠征軍の指揮官たちがまかっていた。騎士階級に属さない身分の低い巡礼たちも、出発にあたって家財を処分したり、借金をしたりして、なにがしかの路銀を用意はするが、行程内の寝食は軍団の經理に依存するのが通例であったから、しばしば極端な兵糧不足に悩まされることがあるとしても、總体的には生活費の保証つき就職状態を確保することになる。

そのうえ、戦場働きの手柄をあげれば、戦利品の有利な配分を受け、軍団内の地位身分の昇格が期待できる。征服が完了し、占領地の分割がおこなわれる時点では、それぞれの身分に応じた論功行賞によって、土地や商権などの授与がある。もちろん、これらの財貨はシリア、パレスチナの元の支配者と原住民の犠牲において獲得されたものであるが、その所有権の移転によって十字軍士は肥え太ったのである。そのような掠奪による富の占有について、最初の十字軍がエルサレムに突入した直後の市内の模様を、シャルトルのフーシェは次のように語っている。